

土方巽・著「病める舞姫」を読む —「模写」について

舞踊評論 國吉和子

＜目的と方法＞ 暗黒舞踏の創始者、土方巽(1928秋田—1986東京)が著した「病める舞姫」(1977年4月—1978年3月「新劇」連載の初出と、1983年筑摩書房刊行の単行本、以下「舞姫」)をテキストとして、土方の舞踏の特徴を明らかにすることを目的とした。

全14章、70近い小節によって構成される本文の内容は、一貫して幼少年期の記憶に基づいた土方の心象的自伝である。その文章はことごとくが、身体の知覚を通して編み出された言葉で構成された作品世界であるため、記述は通常の時間展開を辿ることが無く、情景は錯綜し反芻する多層な断片からなっている。この中から、土方の舞踏を形成する具体的な動きの生成を裏付ける言葉を抽出した。

また、土方の記述と実際の舞踏の動きとの関係を考える上で、ビデオや写真、インタビューから伺えるいくつかの踊りと、それと関連すると思われる記述を重ね、考察の参考とした。

＜結果と考察＞ 「舞姫」の文章の特徴と、土方の舞踏の創り方や個々の動きとの関係を考察する過程で、注目されたのが隠喩(メタファー)の多様という手法であった。言葉による隠喩表現と身体の状態の記述が相互に連鎖し乗り入れ浸潤しながら、全編が徹底した隠喩で記述されているのである。Aを他のBを通して理解し、経験することが隠喩の働きである。AとBとはある類似性によって結びついており、例えばAが未知のものであるとしても、既知のBという枠組みを通して類推し、新しい事態を捉えることができる。つまり、過去に体験した身体の状態と同様の状態を、土方は自らの身体知覚を駆使した隠喩によって記述しているのである。土方独特の隠喩によって暗示される事柄とそのイメージは、容易に一定の像に定着せず、常に淡くゆらぎ流れているため、特定のイメージに収束させることは困難であり、読み手(受け手)の側に絶え間無く「能動的な知覚体験」を強いる。

さらに、こうした言葉による隠喩に拮抗させて、土方は周囲の人々や生き物の動きや状態を身をもって写し取り、それと同じ/近い状態になろうとする、身体による模写をおこなっていることが記されている。例えば、本文中の「模写する、振り、真似る、描写、写生、デッサン、映す、写しとる、似せる、やつす」などの語が、極めて具体的な動きを模写する場合に使われている。その中

の一例を挙げると、1967年から1969年にかけて土方が「嫁」あるいは「お嫁さん」の踊りとして繰り返し踊っていたものの原型と考えられる動きが、第3章2節(p.34)に見られる。これは少年がお嫁さんの歩き方を真似て見せる場所である。この他、「幽霊の縄飛び」(第6,14章)など、「舞姫」には、土方の舞台作品の特定の踊りを想起させるものもあるが、すべてをそのまま舞踏の動きに置き換えて考えることはできない。

対象の働きや構造を再現する「模倣」と違って、「模写」は対象の形体や状態を忠実に真似て写し取ることであり、身体的な体験なしには遂行できないものである。尼ヶ崎彬は、芸道における型の習得過程の「なぞり/なぞらえ」を身体の隠喩的行為だと指摘しているが、模写はこの「なぞり」に近い用いられ方であるといえるだろう。しかし、芸道のように習得すべき既存の型を持たない舞踏は、同じ状態になるべき手本がない、いわば、到達点がないのである。従って、模写による隠喩を重ねることによって、知覚は不断に試されることになる。安定と定着に向かおうとするイメージを脅かし、常にイメージが衝突する場を作ることによって、身体知覚に衝撃を加えているのである。

土方が隠喩によって語ろうとしたことのすべては、身体あるいは身体に密接に関わるものである。自身の身体を巡る土方の隠喩の特徴を挙げるとすれば、気象の変化や大気と同様に、不定形で変わり易い性格を持ち、さらに脆弱で退行的な、翳りのある負の方向に向かう性向である。人間の精神活動によって形成されるとされてきた「概念」が、認知科学の視点から見ると、概念の形成が身体によって大きく規定されることを指摘したG.レイコフやM.ジョンソンの研究成果を待たずもなく、土方は人間の営みの基盤となるものが身体によって正確に認知されることを、舞踏という表現を通して示すと同時に、身体の知覚に働きかける強力な方法論として舞踏を生み出したのである。

＜結論＞ これまでの研究、評論では、土方の舞踏の技術の中でも、変身(metamorphose)の技術、つまり人間ではないものに「なる」ことによって、人間であることの限界を超え、より豊かな世界に解放されるという点が強調されており、特に、動植物や物など人間以下のものに「なる」ことで、あえて人間としての品格を貶め(degrade)、これまで想像もつかなかったイメージの地平を開くものが舞踏であるとして評価されてきた。しかし本来は、変身ではなく、身体による「模写」を徹底的に行うことによって、ある状況に置かれた身体の状態、換言すればある特定の状態に操作された知覚を体現することを可能にしたといえる。土方のこの創作姿勢は1960年代から一貫している。